

## 日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員  
上野 正博

### 魚の数

漁業団体の強い反対にあつて、水産庁はあつさり禁漁を撤回。昨年と同様に「混獲される程度の漁獲は認める」と方針を変えました。

生きていこうちに逃がすとなるとこれは大変な作業になります。つまり、全面禁漁というのは操業禁止に近いのです。

9月の初め、水産庁は日本海では来年度、マイワシを禁漁にしたいと発表しました。1980年代には我が国周辺で毎年200万ト以上が漁獲されたマイワシですが、最近では10万ト台に落ち込んでいて、ここ数年さらに落ち込んだためです。特に日本海では全部あわせても約1千トしかないという推定されたので、ほとんどいない状態」と水産庁が心配するのにも無理はありません。

おまけに、日本海に1千トという数字はそれほどあてになる数字ではありません。水産省はマイワシの数を調べるために、漁獲量の解析、産卵量調査、稚魚調査、魚群探知機調査、飛行機を使った魚群調査などいろいろな調査を行っています。でも、広い海の上で調べることができないのは、かなり頭張つても桁が合つていない方で、100ト以上1万ト以下くらい

マスコミ各社からは揶揄(やゆ)の声が上がつていましたが、まあ、これはいたしかたがないでしょう。巻き網は、魚の群れを何百匹もあるカーテンのような大きな網で巻いて一網打尽にする漁法。1種類だけが群れていればいいのです。が、ときには数種類が群れていることもあるので、少々の混獲は避けられません。禁漁になれば混獲したマイワシは全部捨てなくてはならないのですから、それもつたいない話。



4、5隻で操業する巻き網船団

しか分からないのです。不確かな数字で規制をするなどという漁業者の反対意見にも十分根拠があるのです。それに60年代のマイワシ不漁期に格別に禁漁などしなくても、時が来ればマイワシは増えたという歴史もあります。海の生き物がある場所にとだけいるかというのは、今回の漁獲規制の問題だけではなく、その生物の生態を調べる上でもっとも基本的なこと。でも、これが本当に難しいのです。多くの生態学者が磯の生物を研究対象にするのは、比較的数を数えやすいということも大きな理由です。でも、水産の研究者はそんなこともいつおれず、魚の数をより正確に推定するために刻苦勉励…暗中模索かも。